令和８年度　日本大学文理学部学術研究発表会〈史学部会〉プログラム

第１会場　３号館　３５０１教室　午前10時30分より
（報告20分　質疑10分）

司会　山本　孝文

10時30分～11時00分
神奈川県西部を中心とした堀之内式土器の様式検討
大学院（博士前期）野元　駿平

司会　古川　隆久

11時40分～12時10分
「アジア主義的な中国観」の構想及び説明
大学院（博士後期）羅　琛

司会　古川　隆久

11時05分～11時35分
ラジオ放送黎明期における放送局の実態
大学院（博士前期）齋藤　花織

第2会場　3号館　3502教室　午前10時30分より

司会　福島　恵

10時30分～11時00分
「南朝斉・梁における皇位継承の正統性-斉明帝・梁武帝と有疾皇族-」
史学科(三年)　田中　奨竜

司会　福島　恵

11時05分～11時35分
康熙帝の対チベット外交とパンチェン=ラマ5世：ダライ=ラマ5世の死去秘匿から発覚後を中心に
史学科(三年)　川村　碧生

司会　田中　大喜

11時40分～12時10分
「源頼家の親裁と北条時政」
大学院(博士前期)　柴　幸太郎

神奈川県西部を中心とした堀之内式土器の様式検討

大学院（博士前期）　野元　駿平

本研究では、堀之内式土器の編年について、様式的特徴（型式群の組合せ）の変化の観点に着目し、再検討を行う。従来の堀之内式土器における研究では、文様構成や器形の変化をもとに細別が行われ、層位的関係や共伴関係などを基礎としたいわゆる従来の基礎的編年が構築されてきた。一方で、これらの時間的情報と土器の様式的変化との関係については、さらにほかの要素を加味したうえで検討する余地がある。そこで、従来の層位的関係や共伴関係を時間基礎としながら、土器の形態・文様・製作技法等の属性を個別に抽出し、それらの変化と組み合わせに着目する。属性ごとの時間的変化と技術的な系列をそれぞれ検討した上で両者を交差させ、堀之内式土器における様式と時間的変化の関係を再検討する。

ラジオ放送黎明期における放送局の実態

大学院（博士前期）　齋藤　花織

これまでの研究では、政府によって利用されることを前提として設立されたラジオ放送局は、政府および逓信省によってその運営をコントロールされ、「透明な拡声器」としてその組織のあり方を確立していったとされてきた。しかし本報告では、ラジオ放送開始当初、政府にとって放送はどのような存在であったのか、そして逓信省や放送局内においてラジオ放送に対する一貫した方針が存在したのかを見ていくことに加えて、その方針のもとで放送局はどのように運営されようとしていたのか、本当に政府の傀儡組織であったと言えるのかについて検討を行うことで、先行研究とは異なる見方を提示する。実際には、戦時下における大々的な政治利用は当初最大の目的としては掲げられておらず、局内や逓信省内には一貫した方針や理想自体は存在したが、具体的な施策や思惑には大きく溝があり、組織としてのあり方を模索し続けていたという放送局の実態を明らかにする。

「アジア主義的な中国観」の構想及び説明

大学院（博士後期）羅　琛

近代日本の中国観は、総括に古典世界の中国に対する尊重と、同時代の中国に対する蔑視がその特徴だと言える。梅蘭芳日本公演を研究する際、史料として扱った『品梅記』からもそのような傾向が見られつつも、もう一つ目についた点は、『品梅記』に文章を寄せた文化人たちの日本の西洋化に対する反省と日本・アジア独自のアイデンティティに対する再認識である。ほぼ同時代に日本で流行しはじめた「支那服」、「支那料理」も、また西洋の「追随」と「対抗」の線に即している。このように、世界の新秩序に順応した近代日本の対中国感情は、西洋のオリエンタリズム的な単純なものとは定義しがたく、その複合性を表すには、「アジア主義的な中国観」という表現がもっと妥当だと思った次第である。

「南朝斉・梁における皇位継承の正統性-斉明帝・梁武帝と有疾皇族-」

史学科（三年）田中　奨竜

身体的疾病を有する（以下、本研究では「有疾」とする）人物は時代・地域を問わず存在してきたが、有疾皇族の身体がいかに政治的に意味づけられ、帝位の正統性や王朝交代の正当化に組み込まれたのかを論じた研究は少ない。そこで本報告では、伝統的な漢人文化を継承しつつも、宗室内で激しい勢力争いが繰り広げられた南朝期に、有疾皇族がいかに生きたのかを明らかにすることを通して、中国史における正統性論へ新たな視点を加えることを目的とする。

具体的には、斉明帝蕭鸞によって廃位された「疵疾」の海陵王蕭昭文と、梁武帝蕭衍によって厚遇された「廃疾」の蕭宝義の事例を中心に取り上げる。彼らの身体的疾病が、皇位継承・王朝交代の正当化においていかに政治的資源として用いられたのかを比較・検討し、疾病が排除の論理としても正統性演出の論理としても機能していた可能性を示しつつ、中国史における正統性と身体の関係を考察する。

康熙帝の対チベット外交とパンチェン=ラマ5世：ダライ=ラマ5世の死去秘匿から発覚後を中心に

史学科(三年)　川村　碧生

一七二〇年、康熙帝の遠征を受けたチベットは、清朝の藩部として支配されることになったが、一六四四年の清の入関以来、このチベットの支配の確立までに約八十年もかかったことになる。

伝統的に宗教的・政治的指導者であるダライ=ラマが統治していたチベットを清朝が支配下に収めていく過程は、その後の清朝の藩部支配の前段階として重要な意味をもつものである。この時期に、ダライ=ラマ5世は老齢のため死去するが、摂政サンゲ=ギャムツオによって十五年にわたってその死は秘匿された。その死が発覚する前後の時期に康熙帝がチベットと向き合う上で注目したのが、チベット仏教でダライ=ラマと同格とされるパンチェン=ラマ5世であった。本報告では、康熙帝がパンチェン=ラマ5世をいかに認識し、処遇したか明らかにするとともに、その対応がいかに清朝のチベット支配に繋がっていくのかを検討するものである。

「源頼家の親裁と北条時政」

大学院(博士前期)　柴　幸太郎

本発表では、頼家将軍期における北条時政の政治的立場や役割を検討することを目的とする。当該期の従来の研究では、頼家の親裁を制限するために「十三人の合議制」が設けられたとされてきた。しかし、近年の研究では十三人の合議制の実態は十三人全員ではなく、そのうち数名による合議だったことが『吾妻鏡』から明らかにされた。また、当該期の一次史料から頼家が親裁を行っていた事実を指摘し、十三人の合議制とは頼家の親裁を制限するのではなく、宿老たちがそれを補佐する体制と捉え直した。

以上のことから、十三人の合議制が頼家を補佐する体制だったとすれば、その中で北条時政は他の宿老たちと同じ役割を担っていたのか、それとも時政固有の役割を果たしていたのかについて、『吾妻鏡』や時政の発給した文書などから検証することとする。